

# Reading 'The Happy Prince'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兵頭, 晴子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5895">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5895</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## ‘The Happy Prince’ を読む

兵 頭 晴 子

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の「幸福の王子」(‘The Happy Prince’) は日本でもよく知られている童話である。この童話を、言葉の持つ意味合い、語の並べ方、発音や音声面から見た文の流れかたの特徴という視点から見ることにより、新たに見えてくるものを示そうと思う。以下に簡単なあらすじを述べ、次に本論に入る。

町を見下ろす高い石柱の上に建てられた「幸福の王子」像は金箔に包まれて燦然と輝いている。目にはサファイアがはめ込まれ、剣の柄には真っ赤なルビーが埋め込まれている。町の人々は毎日王子の像を見て喜びや誇りを感じる。この像は「幸福の王子」と呼ばれていた王子の死後つくられたものだ。彼は喜びと楽しみ (pleasure) のみが存在する美しい宮殿の中で一生を過ごした。人々の嘆き (生老病死, 貧困) が存在することは、像となって高い所から市民の暮らしぶりを見て初めて知ったのである。貧困にあえぐ人々を救うために王子は身に着けていた金箔や宝石すべてを彼らに与える。すっかりみすぼらしくなった王子の像は不用品として処分される。王子の宝石等を人々に届けるために冬まで町にとどまり、命の続く限り尽くしたツバメは凍死する。ツバメもゴミ捨て場に捨てられる。

生老病死, 貧困に苦しむ人々に自分の持つすべてを与えて救おうとする姿、あらゆる人に慈愛を降り注ぐ姿はキリストや釈迦のイメージにも重なる。

### 1. High above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince (下線は筆者)

#### 1-1 High, above, tall という語の意味

この初めの一語がこの話の全てを要約しているともいえる。物理的に高いもの、すなわち天に、より近くまで届いているものは精神的にも高さものであるというプラトンの考え方の実例はヨーロッパ中に見ることができる。たとえばイギリスの多くの大聖堂にはとてつもなく高い天井や、さらに高くそ

びえる聖堂の尖塔がある。そこには少しでも天にいます神に近づきたいという願望が表現されている。また、ヨーロッパの町の広場には石柱の上、はるかに高いところに英雄の像が据え付けられていたりする。あまりに高くして英雄の顔もはっきりとは見えないものもある。

A.O.Lovejoy の *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea* (1936) は中世やルネッサンス期の世界のとらえ方、神—天使—人間—動物—植物—鉱物という存在の階級があったことを示した。それは「存在の大きいなる鎖」とよばれた。ヨーロッパの絵画では、神は雲の上に描かれることがある。高き所に坐していられるのである。天使は神と人間との連絡係として天から舞い降りて人間のもとを訪れる。天使は神と人間との中間に位置している。人間は二本足で立つことにより、他の多くの動物より背が高い。つまり他の動物に比べてより天に近いところに人間の頭がある。旧約聖書『創世記』第一章、27、28 節には、「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」と書かれている。つまり人間は地上のあらゆるものを支配するものとして描かれている。人間の始祖であるアダムとイヴは、楽園 (paradise) の中心にあった知恵の木の実を食べてはいけないという神の命に背いた。蛇が実を食べるようにイヴを誘惑したからである。その結果人間は楽園から追放された。人間を墮落させた蛇は動物の中でももっとも低い位置、すなわち地面をはい回っている。蛇は道徳的に低いものだけということ、地面をはい回るという形で示しているのである。このように物理的に高い位置にあることは、自動的に精神性の高さを示し、同様に低い位置にあることはその逆を示すと考えられていた。

イギリスの貴族階級はスポーツを奨励してきたが、その理由はフェア・プレイの精神を養うと同時に、彼らの身長を高くして、召使いを見下ろす位置を確保することであったともいわれる。かつて会田雄二氏が「イギリスの貴族のように、召使いを牛や馬のように扱うことは私にはできない。」とある新聞に書いていられたが、まさに人間と動物の間にあるぐらいの階級差が貴族と召使いの間にはあると彼らは考えていたのであろうし、背の高い貴族と背の低い召使いはそれを象徴的に示しているのであろう。「存在の大きいなる

鎖」では同じ人間でも王、貴族、一般人というランク付けの細分化も示されている。

この短い一文の中には High のほかにも above, tall という「高さ」を示す語がある。それは、神の高さ、神の偉大さに通じる王子の愛を示しているのであろう。神の愛は一人の例外もなく地上のすべての人を愛する絶対の愛であり、われわれ人間のように、この人は愛するが、あの人はあまり愛せないといった相対的な愛ではない。これはあらゆる宗教の神（仏）に共通のものだ。雨は善人にも悪人にもすべて人の上に一様に降るように仏の愛はすべての人々に注がれると説いた僧もいる。マザー・テレサが貧困のただなかにあるインドの子供を目についた頃に片端から洗ってやり、食物を与え、やがて教育を受けさせたのもこの絶対の愛に近いものと言える。日本と異なりヨーロッパではそのような魂の高さを、物理的な高さで表している。High はこの物語全体のテーマである。無償の、絶対的な愛がこの 1 語に集約されている。

city は人間が住んでいる所、日々生活している所を示す。王子の愛は、人間の力をはるかに上回ることが High above the city という、王子の置かれている位置により表現されている。それは、人智を越える、人間のレベルを超える高さ（above the city）なのである。つまり city は地上全体、人々の住む地球上すべてを象徴的に示している。神がこの世のすべてを見ていられるように、Happy Prince が city 全体を見渡している。

## 1-2 この一文の音、流れ、抑揚、および文の組み立て方

音声面、および文の形から見ると、最初の High はハイ [hai] と伸ばして発音されるだろう。むろん辞書には [ha:i] という表記はない。普通ならば「ハイ」と短く発音される語である。しかしこの文の場合、High が文頭に置かれるときは、伸ばして読むほうが自然であり、短く読めばそっけない印象となるだろう。ギールグッドによる朗読を聞いてもやはり「ハイ」ではなく「ハイ」と発音している。心の中で、高い石柱の下から上へ、柱にそって視線が移動する。そして「うわー、たかーい！」と思う。high は「ハイ」[ha:i] と読まれるのにならって、訳は「高い柱の上に」ではなく、「たかーい柱の上に」とするとより効果的であり、原文の音声にも忠実であるということになる。次の tall も「トール」と長母音で発音されるので、High と並んで「おー、

たかーい」という印象を与える言葉だ。「ハイ」「トール」の長音は、心の中における下から上へと移動する視線の動きを示す。同時に「ハイ」の中に含まれる「アー」および「トール」に含まれる「オー」音は、高さに対する驚きも示す。

### 1-3 On a tall column の意味と効果

高い円柱の上に。イギリス、トラファルガー・スクエアにあるネルソン提督の像はとてつもなく高い円柱の上に立っている。あまり高すぎてネルソンの顔、表情などはわからないものもある。確かに町の建物の高さをはるかに越えている。Happy Prince の像もこれほど高かったのではないか。

ここまでの、8語のうち、high, tall, は「高い」という意味である。そして above, on は「上に」という意味だ。column はギリシャ神殿の高い円柱をイメージさせることばである。つまり、8語のうち、5語は「高さ」を示すことばと言える。残り3語のうち、2語は a と the, そして、さいごの1語は、高いものと対照的に地面に広がる、低い位置にある city である。つまり、ほとんどが「高さ」を示す言葉で構成されている。それが低い位置にある city という語と対比されている。像の高さ、町 (city) の低さを読者の心の中にしっかりと印象づける、見事な書き出しである。High above the city と on a tall column は同じぐらいの長さである。いずれも読者 (聞き手) の視線をまず上に向けさせている。高さを強調するこの一文で、神と Happy Prince のイメージはダブるようにしくまれている。

この文を通常の語順に戻してみると実につまらない説明的な文となる。すなわち The statue of the happy prince stood on a tall column high above the city. となる。文の初めと終わりの語はそれぞれ statue, city というありふれた語である。しかし原文の、high で始まり happy prince で終わる鮮やかな始め方と終わり方、および、そのあいだに生まれる美しい音の流れは、短いながらドラマティックですらある。すなわち、初め、中、終わり、起承転結、盛り上がったものが美しく終わること、が感じられるであろう。

### 1-4 stood the statue of the happy prince

音読すると、stood, statue はともに st 音で始まる。これは、stop の場合と同様、流れるというよりは流れを止める音である。ずーっと上へ視線をた

どっていくと、「おっ」こんな「像」が「立っていた」、と目をとめる。さらに、prince のところで文が終わるので読み手はピリオドで少し休止するだろう。すなわち、視線は円柱の下から上へのびてゆき、stood, statue のところでぴたっととまって、そこに Prince すなわち「王子の像が立っている」ことを確認する。このように、読者の目の動きと、この文全体の音の流れは一致している。

この一文を読み終えたら、次の文を読む前に少し間を置くべきである。たとえば、コンサートの1曲の最後の音が鳴り響いた直後は、耳の奥に残る残響を聴衆は楽しんでいる。この文を読み終わったとき、最後の Happy Prince という言葉、この物語のタイトルとなっている言葉が、耳の奥に残ることを感じるであろう。

この文の中で強く読まれる語は High, tall, statue, happy であろう。High, tall および happy は「高きもの」「人々を幸せにするもの」である神をあらわすのにふさわしい形容詞である。statue もキリスト像などを連想させる言葉であるとも言える。

## 2. He was gilded all over with thin leaves of fine gold, for eyes he had two bright sapphires, and a large red ruby glowed on his sword hilt.

耳の中に残った happy prince の様子が次の文に描かれる。王子を飾る、金箔、赤、青の宝石がきらきらと輝いてまぶしい。円柱のはるか上のほうで星のように、太陽のように、天使のように輝いている。

### 2-1 He was gilded all over with thin leaves of fine gold,

All (オール), leaves (リーブズ) など長く伸ばす音、および gold (ゴールド) という語の中に含まれるオウという二重母音、これらの音は、広く全体に広がって行く感じがある。それは、大きな身体全体が、「ぜんぶ」(全部) 金箔で覆われているということを表現するのにふさわしい音である。

### 2-2 for eyes

全体の様子を述べた後、「目は」と小さな部分に着目する。読んでみると for eyes のあと短く止まることになる。ふっと王子の目に気づいてそこで視線が止まる。

### 2-3 two bright sapphires

ここでは two と bright に stress を置く、つまり、この2つを強く読むこ

とになる。Two, bright と言いつつ、左の目、そして右の目と言う風に見ているように感じられる。

2つのサファイアがキラキラッと光っている。王子の青い目が、文字通り宝石の輝きを放っている。

#### 2-4 large, red ruby

large の初めの l (エル) の音, red ruby のいずれも r (アール) で始まる音の重なり (頭韻) が独特の効果を生んでいる。l 音 (エルの音) は流音ともいわれるようだ。水の流れや光を表すといわれる。たとえば light, illuminate, lux など。次に続く glowed と hilt の l 音とともに宝石がキラキラと光を放つ様子を表すのに効果的である。2つの r 音 (アールの音) も滑らかさを感じさせる。

#### 2-5 glowed on his sword hilt

glowed と hilt はやや強く読まれる。同時に、この hilt のあとほんの少しのあいだ休止があるだろう。赤いルビーは光っていた (glowed), それは剣の柄の飾りである。像を見る人の視線は、青い眼 (サファイア) から、赤く光るルビーへと動いてゆく。そしてそれは剣を飾っていたのだとわかる。

ここまでの2文, つまり High で始まる文と He was gilded で始まる文の中の語には、「オー」「オウ」「アー」など感嘆するときの音が多く含まれている。初めから追ってみると High「アー」, tall「オー」, all「オー」, over「オウ」, gold「オウ」, large「アー」, glowed「オウ」, sword「オー」の8回使われている。「オー、なんてすばらしい！」という王子の像に対する感嘆の声も聞こえてくるようだ。

#### 3. He was very much admired indeed.

今までは、高いところから (High above the city) 町を見下ろしている王子の像の記述であったが、ここからは、その眼下に広がる町の中の (above the city ではなく, in the city) 人々の、王子の像に対する反応が描かれている。

#### 4. 'He is as beautiful as a weather cock,' remarked one of the Town Councillors who wished to gain a reputation for having artistic tastes; 'only not quite so useful,' he added, fearing lest people should think him unpractical, which he really was not.

まずは、この町では自分はVIP（重要人物）だと考えているらしい市議員が王子の像について‘He is as beautiful as a weather cock,’と言う。今までの美しい文に比べてこの文の何とぞこちないことか。まるで中学生が文法練習で作ったような英文，as…as構文を練習するための英作文のようだ。

その文の内容もまたお粗末極まりない。「自分は芸術的センスがあると言ってもらいたいため」あの美しく気品に満ちた王子と、風見鶏を比較して同じぐらい美しいと言う。風見鶏は風の吹くままにくるくる回って風の向きを知らせるものだ。金色に輝き高い所から町の人々を見守っている王子の像と比べること自体、王子の像の本来の価値を理解していないことがわかる。王子の像は人々の「心」に潤いを与えるのが大きな役目であり、風見鶏は風の向きを知らせる「実用的」なものだ。風見鶏はどちらでも風の向きの通りに動くので、誰にでも自分に対してよい感情を持ってもらうために、自分の意見をこころろ変える人の形容としても使われる。彼は選挙で当選するためにいつも市民などのご機嫌取りに一番気を使っており、本人は確固たる考えを持たない人であることは次に続くせりふからもわかる。

自分は現実的ではない（unpractical）と思われるのをおそれて「ただ、（王子の像は）あまり実際の役にはたたないが」と付け加える。彫刻や絵画について実際の役に立つかどうかコメントすること自体がアッと驚く愚かさである。自分が芸術的センスを持っていると思われたい、同時に芸術家によくあるような現実離れした人間ではないとも思われたい。そこで自分としては精いっぱい芸術的なコメントをすると同時に、しっかりした生活感覚を持っていることを示そうとする。最後に which he really was notつまり he really was not unpractical ということによって彼は生活感覚にはすぐれているが芸術的な感性はないことがわかる。この文の書き方についても he really was not unpractical と書くのと which he really was not では全く印象が異なる。notで終わる文では not が強く響くため、「彼はまったくそんなものじゃないのさ」という印象がある。彼は unpractical どころかバリバリの practical な人間だ。‘The Happy Prince’ の作者オスカー・ワイルドは「芸術のための芸術」(Art for Art's sake.) を説いた。その彼が敵視したといっても過言ではないのがこの種の practical な人々である。



5. **'Why can't you be like the Happy Prince?' asked a sensible mother of her little boy who was crying for the moon. 'The Happy Prince never dreams of crying for anything.'**

「名月を取ってくれろと泣く子かな」という俳句がある。洋の東西を問わず、月の美しさを知る子供と、「そんなことは無理だよ」と現実的な対応をする大人の対比があるのが面白い。ただしこれを俳句にした時点でこの作者は子供にある種の同情、共感をもっているように見える。しかしここに登場する母親はあまり子供に共感しているようには思えない。彼女は sensible なのだ。

イギリスに滞在したときに、実にたびたび sensible という語を聞いた。「賢い」と訳せるだろうか。proper と並んでイギリス人がよく使う言葉の一つだろう。たとえば、「ぼくは若いときに一生懸命働いて、老後はゆったりと過ごそうと思う」といった人に対して相手は 'That's sensible' と答えていた。

6. **'I am glad there is someone in the world who is quite happy,' muttered a disappointed man as he gazed at the wonderful statue.**

何か幸せの原点に気が付いているが、自分も幸せになれる可能性を持っていることにはまだ気づいていない状態の青年が描かれている。仏教の説話にこんな話がある。ある人が貧困に苦しむ知人を訪ねた。するとその青年は眠っていた。彼のために持ってきたお金をそのまま置いておくと取られてはいけないと思ったため、彼は青年の襟の内側にお金を入れてから縫って閉じておいた。知人が帰ったあと目が覚めた青年は、襟の中に大金があるのに気付かずあいかかわらず貧乏な生活を続けた。幸福とは気づきによって手に入れることができるということであろう。最悪の状態であってもよくよく考えれば一つぐらいいい点を見つけることができる。ある状況に置かれてい 場合、その状況に不満ばかりを感じている人は不幸であろうし、良い点を見つけて幸せだと思う人は幸福だと感じるだろう。

7. **'He looks just like an angel,' said the Charity Children as they came out of the cathedral in their bright scarlet cloaks, and their clean white pinafores.**

「王子様って天使そっくりだね」と救貧院の子供たちが言う。Charity Children はとりあえず救貧院の子供たちと訳せるが、Charity とは悪人、善

人に限らずすべての人に降り注がれる神の大きな愛であろう。そういう精神で、貧しい子供たちを養育しているのだろうが、この Charity Children という表現は子供たち自身が神の愛とつながっているような雰囲気をもたらす。こどもたちは真紅のマントと真っ白なエプロンをしている。それは真っ赤なルビーのついた剣を持ち、全体が金箔で輝く王子の像ほど豪華ではないが、子供たちの服の色はいくらか王子の像との類似を感じさせる。彼らの「天使そっくり」という言葉は、これからわが身を犠牲にして人々のためにつくす王子の心を誰よりも正確にとらえている。彼らは大聖堂から出てきたところである。その教会で語られた神の教え、神の愛を素直に正確に理解していたであろう子供たちだからこそのように表現できたのだろう。ところが、おそらく子供たちを引率してきた数学教師は次のように言う。

**8. ‘How do you know?’ said the Mathematical Master, ‘you have never seen one.’**

「なぜそんなことがわかるんだ？天使など見たこともないだろうが」とかってな思いつきを言うなど叱っているようである。子供たちは無邪気に言う。

**9. ‘Ah! but we have, in our dreams,’ answered the children; and the Mathematical Master frowned and looked very severe, for he did not approve of children dreaming.**

「でも夢の中で（天使を）見たことがあるよ」と子供たちが答えると数学教師は眉をしかめて厳しい顔をする。科学者は  $A = B$ ,  $B = C$ ,  $\therefore A = C$  のように、証明されるものしか信じない。あるいは現実に目に見えるものしかその存在を認めない。夢の中で見たものなどは彼にとっては幻想、妄想のようなものだ。それで数学教師はしかめ面をしたのである。かれは非科学的なことは認めない。ところが夢、直観、想像力は科学とは全く異なる方法で本質を見極めることがある。

夢は古代においては洋の東西を問わず重要視されてきた。旧約聖書にもある通りファラオは夢を解釈するヨセフをエジプトの宰相にとりたてた（「創世記 41 章 1 節-45 節」）。しかし夢を証明することはできないので、科学万能の時代になると、夢は根拠のないものとして軽く扱われるようになった。夢が再び復権したのはフロイトやユングが現れ、精神分析、心理学を学問とし

て確立してからである。

**10. One night there flew over the city a little Swallow.**

これまで、市会議員、母と子、落胆している男、救貧院の子供たち、数学教師の6種類の人間が登場した。この作品に全一の動物であるツバメは7番目に登場する。この文も音読し終わると耳の中に残る言葉は a little Swallow. であろう。冒頭の文の最後にある Happy Prince という語や、市会議員について書かれた文の最後が which he really was not. と not で終わることにより、その語が読者（聞き手）の耳の中に残響としてのこり、他の語より印象深いものと同様である。ツバメが王子の像に出会うまで、24行にわたってツバメの描写が続く。これは、今まで登場したどの人物についての描写よりも長いものである。他の多くのヨーロッパの童話に見られるような動物の変身はない。しかしツバメの心の変化、心の成長がみられる。 (次号に続く)

注

1. テキストは *Collins Complete Works of Oscar Wilde* (Glasgow, Harper Collins, 1994) を用いた。訳は拙訳である。